

# 20世紀前半バーミンガム大学の地域連携

—労働者教育協会との連携に焦点をあてて—

土井 貴子

(岡山理科大学教育学部)

本論文は、バーミンガム大学を取り上げ、20世紀初頭の大学における地域連携を考察するものである。1900年に大学に昇格したバーミンガム大学は、当初から大学拡張委員会を組織し、大学拡張講義を実施した。労働者教育協会が誕生すると、1905年にバーミンガムで開催されたWEA年次集会の開催を支援し、同時にWEAの地方組織であるミッドランド地区の設立を導いた。合わせて、バーミンガム大学とWEAミッドランド地区とが連携したソーシャル・スタディ・コースを開設した。同コースは、労働者たちが哲学、経済学、経営学、行政学、公衆衛生をより組織的体系的に学ぶことができるコースであった。その後、大学チュートリアル・クラスが始まると、バーミンガム大学もWEAミッドランド地区と連携して同クラスを各地で組織した。大学チュートリアル・クラスは、1920年代には、バーミンガム大学における地域連携の主要な活動の一つとなった。バーミンガム大学は、1919年から独自にIndustrial Certificate Departmentを組織し、開設した。それは、労働組合と連携し、正規の学生として労働者を受け入れ、彼らが新たな学科で1年間働きながら学ぶことができる取り組みであった。

キーワード：大学成人教育、イギリス、バーミンガム大学、労働者教育協会

## はじめに

本論文の目的は、20世紀前半のイングランドの大学における構外教育に焦点をあて、地域連携という観点からその活動と連携のありようを実証的に明らかにすることにある。

イングランドの大学における構外教育の歴史はこれでは、1873年にケンブリッジ大学から始まった大学拡張講義、1885年にロンドンのイースト・エンドに設けられたトインビー・ホールではじまったオックスフォード大学による大学セツルメント、そして1903年に誕生した労働者教育協会(Workers' Educational Association: 以下、WEAと略記)とオックスフォード大学による大学チュートリアル・クラスの3つが取り上げられてきた。そして大学拡張講義はケンブリッジ大学が、大学セツルメントと大学チュートリアル・クラスはオックスフォード大学が計画、実施したと理解されてきた。ケンブリッジ大学の大学拡張講義についてはウェルチ(Welch, 1973)の研究が、オックスフォード大学の大学成人教育についてはゴールドマン(Goldman, 1995)とオックウェルとポリンズ(Ockwell, & Pollins, 2000)の研究がある。日本においても、宮坂(1996)、香川(1991, 1992, 2005)、安原(2006)、松浦(2000, 2004)、渡邊(2006)らなどによる研究がある。ケンブリッジ大学と

オックスフォード大学における構外教育を取り上げた先行研究は、国内外で一定の蓄積がある。

しかし大学の構外教育は、なにもケンブリッジ大学とオックスフォード大学だけが取り組んでいた教育活動ではない。当時、イングランドの大学において広く取り組まれていた。とはいえ先行研究では、オックスブリッジによる取り組み以外に焦点が当てられることはほとんどなかった。また、大学拡張講義や大学チュートリアル・クラスは、たいていの場合、成人教育の領域において取り上げられており、かつ、その取り組みのはじまりのみが考察されてきた。本稿で取り上げるバーミンガム大学の大学チュートリアル・クラスもそうである。WEAに焦点をあてた研究のなかにミッドランド地区を取り上げた論稿がある(Roberts, 2003)。また、バーミンガム大学とWEAの活動に焦点をあてた論稿については、45周年を記念してWEAが刊行したパンフレットがあるのみである(Studd, 1950)。

一方大学史研究においても、大学の構外教育に焦点があてられることはほとんどなかった。というのも、大学史研究では大学の機能のうち研究と教育に関わる領域に主たる関心が向けられ、地域連携や構外教育といった領域はその周縁に位置づけられるからである。バーミンガム

大学においても、大学史のなかではわずかにふれられているに過ぎない(Ives, 2000)。

そこで本稿では、イングランド中部にある都市バーミンガムにおいて1900年にユニバーシティ・カレッジから大学に昇格したバーミンガム大学の構外教育を取り上げる。同大学における1900年から1920年代までの構外教育を地域連携という観点から実証的に明らかにすることを試みる。具体的には、バーミンガム大学が地域の労働者教育団体であるWEA ミッドランド地区といかに連携し、どのような教育活動を展開したのかを考察する。その際、議事録、報告書、カレンダーといった大学に残る史料と、WEAの年次報告書や機関誌といった労働者側の史料の両方を用いることとする。そうすることで大学と地域の労働者組織の両方の視点から大学による地域連携の歴史を考察することができると思う。

## 1. バーミンガム大学設立期の構外教育

### 1.1. 市民大学

本稿で取り上げるバーミンガム大学は、イングランド最初の「市民(civic)大学」と位置付けられる。市民大学には、現在のニューカッスル大学、マンチェスター大学、リーズ大学、ブリストル大学、シェフィールド大学、リバプール大学、そしてバーミンガム大学が含まれる。市民大学の特徴については議論があるが、共通しているのは、イングランド各地の地方産業都市に誕生した点と、ユニバーシティ・カレッジ(University College)を経て大学に昇格した点である。

市民大学の誕生は、これまで高等教育の機会を得ることができなかった地方産業都市に住む人々にその門戸を開いた。安原(2021)は、市民大学の歴史的意義を4つ指摘している。本稿に関わる市民大学の歴史的意義は、「専門職を含む中流下層階級、一部の労働者階級、女性などに高等教育機会を提供して地方都市の教育・文化や産業・経済の発展」を促進させた点である。市民大学が設立されたのは、産業革命を経て発展していた北部イングランドの都市をはじめとした産業都市においてであった。バーミンガムは、蒸気機関を開発したワットが活躍した都市である<sup>1)</sup>。

こうした産業都市では、いっそうの産業発展に伴って、高度な知識・技術を身につけた人材の需要が高まっていた。ユニバーシティ・カレッジの誕生を導いたのはこうした都市の高等教育要求であった。バーミンガムの場合も同様であり、当初は「地域産業の発展に資するための科学・技術教育」をおこなう教育機関としてスタートした<sup>2)</sup>。

市民大学のもう一つの特徴は、前述の通り、いずれもユニバーシティ・カレッジを経て大学に昇格した点にある。ユニバーシティ・カレッジとは、教育機関としての法人格のみを有し、学位授与権をもたない高等教育機関であった。イギリスでは、伝統的に、教育機関としての認可と学位試験・学位授与機関としての認可は異なっていた。例えば、市民大学設立以前から存在したオックスフォード大学とケンブリッジ大学は、カレッジ(学寮)を基本組織とする学寮制大学であるが、ユニバーシティ(全学)のみが学位授与権をもっている。一方カレッジは、「教師と学生から成る自治的生活・教育共同体」であり、チューターによる個人指導であるチュートリアル・システムを採用した教育の場である。カレッジは、教育機関としての認可はもっているが、学位授与権はもっていない。市民大学の前身のユニバーシティ・カレッジの場合も同様に、高等教育機関の認可は得ていたが、学位授与権は与えられなかった。

20世紀に入り、ユニバーシティ・カレッジが市民大学へ昇格する際、新たな大学としてのあり方が模索された。山崎(2021)は、市民大学が大学の概念を変容させた指摘している。それは、市民大学が教育と試験/学位授与を同時におこなう「単一」の大学として設立されたためである。というのも市民大学は、大学の機能として研究を重視しており、「ドイツ研究理念を早くから唱導し、受容した」とされる<sup>3)</sup>。このことは、市民大学の歴史的意義の一つでもある。市民大学は、オックスブリッジとは異なり、教育機関としてのカレッジ(学寮)をもたない、研究機能、教育機能、学位授与権をあわせもつ「大学」として20世紀に誕生した。その最初がバーミンガム大学だったのである。

### 1.2. 市民大学としてのバーミンガム大学

バーミンガム大学が市民大学になるまでの過程とその特徴をみていく。バーミンガム大学は、1875年にジョサイア・メイソン(Josiah Mason)による寄贈をもとに設立されたメイソン科学カレッジ(Mason Science College)を前身としている。当初は、メイソンが企図した地域産業の発展に資するための科学・職業・技術中心の教育をおこなうカレッジであり、数学、物理学、化学、生物学の4講座からスタートした。発足時は、昼間の学生だけでなく、夜間の学生もいた。その後、1892年までに工学や古典学などの講座を設置し、1898年にメイソン・ユニバーシティ・カレッジ(Mason University College)となった。この時点ではまだ、いわゆるユニバーシティ・カレッジとしての「徒弟期間」であり、メイソン・ユニバーシティ・カレッジも前述のとおり学位授与権をもたなかった。カレッジの学生が学位を取得するためには、ロンドン大学の学外学位試験

を受けて合格する必要があった。ロンドン大学の学位取得要件は、ギリシャ語やラテン語といった古典学を含む広範な分野の知識の学習にあった。そのため、職業や技術教育を中心としたメイソン科学カレッジは、医学部、科学部、人文学部をもつユニバーシティ・カレッジへと段階的に改組されたのである。

メイソン・ユニバーシティ・カレッジは、設立時点ですでに約 1,000 名の学生を擁していた。またカレッジには、32 名の教授と 15 名の講師(実験助手を含む)からなる教育体制が整えられており、その中には哲学のミュアヘッド(J. Muirhead)や古典語のゾンネンシャイン(E. Sonnenschein)といった著名な教授もいた(安原, 2021)。

バーミンガム大学は、1900 年に勅許状(Royal Charter)を得て、大学に昇格した。この時、バーミンガム大学は、都市の産業や商業に役立つ教育並びに研究を推進することを目標に掲げ、「バーミンガム市民のためのバーミンガムの大学」となることを標榜していた。バーミンガム大学は、設立時に大規模な募金活動を展開した。国内外の多様な企業や団体、個人から寄付が寄せられた。中村(2016)によれば、この寄付金集めに貢献したのは、バーミンガムの市民であった。バーミンガム大学は「市民に奉仕する大学」をめざした。

### 1.3. 初期バーミンガム大学における大学拡張講義

バーミンガム大学は、バーミンガム及び近隣地域に住む、これまで高等教育機会を得られなかった人々、とくに労働者たちに教育機会を提供することについてどのように考えていたのであろうか。

19 世紀後半から 20 世紀にかけて、バーミンガム大学に限らず、イングランドの大学は、高等教育機会の開放に迫られていた。例えば、19 世紀のオックスブリッジ改革の基本テーマの一つは「国民化」であり、非国教徒、女性、そして労働者階級への門戸開放が求められた(安原, 2021)。しかしながら労働者階級の場合、大学へとつながる中等教育段階において古典学を含む教育内容や授業料等をめぐる経済的課題といった障壁があり、正規の学生として労働者たちを大学に受け入れることは困難であった。

アンダーソン(2012)は、大学での教育機会を幅広く労働者に開放する際の「もうひとつの道」として大学拡張(university extension)をあげている。バーミンガム大学も設立当初から大学拡張講義を実施していた。大学昇格翌年の 1902 年に、バーミンガム大学は大学拡張委員会を正規の委員会として設置した。

大学拡張委員会は 1903 年 7 月から活動を開始し、

チェルトナム、コヴェントリ、レスター、ライトウッズ、タムワース、ウルバーハンプトンにおいて 5 年間で 12 のコースを実施している。

学長のロッジ(Oliver Lodge)は、労働者の教育要求の高まりを認識していた。学長が大学の評議会(Council)に毎年提出している報告書(以下、「学長報告」と略記)のなかでロッジは、「大学拡張の課題は、切迫しつつある。特に労働者に対する夜間クラスに関連するそれは、喫緊の課題である。」と述べている。しかしながら、労働者のための夜間クラスの恒常的な開設は「大学の事業」ではないという。職員の負担の増大とミッドランド・インスティテュートやテクニカル・スクールの活動に対する侵害を理由としていた。とはいえ、他大学の大学拡張講義と連携することで科目や地域で対応できる部分もあり、改善が必要だという見解を示していた<sup>4</sup>。

大学拡張講義は、たいいていの場合、地方センターが科目や講師を決定し、大学に依頼する。大学は講師を派遣する。講座の広報、受講生の募集、受講料の徴収、会場の手配等は地方センターがおこなう(土井, 2001)。バーミンガム大学が実施していた大学拡張講義の一例を示す。1906 年 11 月の大学拡張委員会事務局長による報告書によれば、秋学期にマスターマン教授(M. A. Masterman)がコヴェントリで「ナポレオンの時代」という 6 回の講義コースをおこなっている。受講者は継続的に講義に出席しており、運営も順調で経費をすべて支払っても 27 ポンド残った。来年も講義コースを計画していることが報告された<sup>5</sup>。

また、ライトウッズでもマスターマン教授による大学拡張講義が実施された。ライトウッズでは、前回の夏にケンブリッジ大学で反響のあった「英国の協会」が選ばれた。今回の会場は、企業が所有するライトウッズ公園内にあるホールであった。この講座は大変人気があった。収容定員 70 名のところ最大で 122 名の受講希望があった日もあり、多くの人をお断りしなければならなかったと報告されている。ライトウッズでは、経費を賄うための保証基金を立ち上げたことと、企業が所有する公園内の施設を利用することの 2 つを新たに試みており、良い結果を導いたと評価されている。その他にも 2 つの地域での講義コースの実施が報告されていた<sup>6</sup>。

大学拡張委員会の委員は、1905 年 11 月時点での委員であるが、学長、副学長、アシュリー(W. J. Ashley)、コリンズ(J. C. Collins)、フィードラー(H. G. Fiedler)、ヒル(Hill)、ヒルハウス(W. Hillhouse)、ヒューズ(A. Hughes)、ラップワース(Charles Lapworth)、マスターマン、ミュアヘッド、レッドメイン(R. Redmayne)、ターナー(T.

Turner)、ワッツ(W. W. Watts)であった<sup>7</sup>。いずれも大学人であり、地方センターの代表者は含まれなかった。パーミンガム大学は大学昇格当初から、大学拡張委員会を設置し、講師をミッドランド各地に派遣し、これまで高等教育を得られなかった人たちに講義を提供した。

## 2. パーミンガム大学と労働者教育協会との連携—ソーシャル・スタディ・コースの導入—

### 2.1. 労働者教育協会の誕生

アンダーソンのいう「もうひとつの道」は、大学拡張講義だけではなかった。1903年に、高等教育の労働者階級への普及を目的として労働者教育協会(WEA)が労働者階級のなかから生まれた。WEAは、生活協同組合員であったアルバート・マンズブリッジ(Albert Mansbridge)を中心に労働者成人への高等教育の振興を目的として設立された任意団体である。パーミンガム大学は、WEAと連携して労働者たちを対象とした講座等を計画、実施した。

ここではまず、WEAについて述べ、続いてパーミンガム大学とWEAとの関係について考察する。本稿にかかわるWEAの特徴は、2つある。一つ目は、WEAが労働者階級への高等教育の振興という目的のもと、大学と労働組合や生活協同組合といった労働者組織を一つに結びつけた点である(土井, 2008)。パーミンガム大学もその設立当初からWEAに関心をもっていた。1903年8月にWEA公開設立会議がサマー・ミーティング中のオックスフォード大学において開催されたが、その会議にパーミンガム大学のマスターマン教授も参加しており、そこで議論に加わっていた<sup>8</sup>。また、1904年7月に出されたWEAの第1回年次報告書によれば、WEAの諮問評議会(Advisory Council)のメンバーにマスターマン教授が選ばれていた。これは、大学拡張当局からの代表としてヴィクトリア大学、ケンブリッジ大学、オックスフォード大学、ロンドン大学、リバプール大学の5大学の代表とともにパーミンガム大学から選出されたものであった。パーミンガム大学は、WEA設立当初からその活動に積極的に関わっていた。

WEAの特徴の二つ目は、WEAの組織化のあり方であった。WEAは、地方支部—地区—中央当局という組織体系をとっていた。とはいえ、WEAの地方支部、地区、そして中央当局は、それぞれが一定程度独立した団体であった。労働者階級への高等教育の振興という目的のもとに緩やかに連合する組織体を形成していた(土井, 2008)。WEAの地方組織は、地域の労働者組織と個人会員の連合体といわれる。それぞれに規約を有し、独自の個人会員お

よび加盟団体を募り、徴収した年会費を中心とした財源をもち、各自で組織した協議会によって運営され、規約の条項にしたがう、自立した団体である。パーミンガムでWEAの活動を支えたプライス(T. W. Price)は、すでに労働者成人教育が多様な労働者階級の団体の実践によって「発酵」状態にあり、「WEAが現れたのは、これ(発酵: 筆者注)を一つの運動へと変えるためであった」と指摘している<sup>9</sup>。WEAの伸展は、すでに各地に中心となる人物が育っており、中核となる生活協同組合や労働組合の地方支部、成人学校といった労働者組織が存在していたことによる。設立当初からWEAは、そうした労働者組織とつながり、会合を開催し、地方支部や地区の組織化を進めていった。1905年7月に出された第2回WEA年次報告書によれば、当時2つの地区と8つの地方支部が設けられていた。しかしながら、パーミンガム周辺及びミッドランドにはWEAの地方組織はなかった<sup>10</sup>。

こうした状況のなか、1905年10月にWEAの年次集会和ミッドランド地区設立の会合がパーミンガムで開催された。パーミンガム大学は、このWEAの活動を支援していた。事前に大学の評議会(Senate)において学長のロッジが議長を務めることが報告されている。また、WEAの設立者であるマンズブリッジの有力な支援者の一人である英国国教会主教のチャールズ・ゴア(Charles Gore)がパーミンガムにおいて、演説者をつとめることも合わせて報告されている<sup>11</sup>。

WEAの年次報告書によれば、会合には600名を超える代表者に加えて、およそ400名の参加者が集まった。大半は労働組合の支部から参加していたという。生活協同組合のフォウルズ(A. Foulds)と労働者階級から選出された議員であったベル(Richard Bell)も代表演説をおこなっている。提案されたミッドランドでの活動は満場一致での賛成を得られ、ミッドランド地区が組織された<sup>12</sup>。およそ半年後にはWEAの地方支部も設けられた。1906年3月、パーミンガム支部がミッドランド地区の中心支部として組織された。

こうしたパーミンガムにおけるWEAの組織化は、パーミンガム大学における労働者への教育機会の提供を拡大させた。学長報告によれば、1905-6年は、「大学拡張や、ソーシャル・スタディ計画として知られている取り組みに対して、多くの時間が費やされ、配慮がなされている。後者(ソーシャル・スタディ計画: 筆者注)は、労働者たちの教育会議の成果」であった。ロッジの言う「労働者たちの教育会議」が前述のWEAの1905年年次集会和ミッドランド地区の設立会議のことである。報告書の中でロッジは、WEAを「労働者たちが自らの高等教育のため

に主導する組織」と評した<sup>13</sup>。確かに WEA は、労働者たちによる団体である。例えば、バーミンガム支部並びにミッドランド地区を支えたのは、プライスであった。労働者階級出身の彼が、1907-8 年からバーミンガム支部の事務局長補佐を、1909 年から 1919 年まではミッドランド地区の事務局長を務めていた。

また、多くの労働者組織がバーミンガム支部を支援していた。1910-11 年時点であるが、表 1 に示す通り、76 の加盟団体を有しており、そのうちの約半数が労働組合、生活協同組合、教師組合といった労働者組織であった。労働者たちが自ら主導して高等教育機会の振興をはかることは、バーミンガム大学にとって重要であったと考えられる。労働者たちが主導する WEA と連携することで、バーミンガム大学は、先に述べた学長報告にあった既存の労働者を対象とした夜間クラスを提供しているミッドランド・インスティテュート等の活動の侵害という批判を避けることができると考えられる。同時に、多くの労働者組織と WEA を介してつながることで、高まっていた労働者たちの教育要求に応えることもできた。

表 1 バーミンガム支部の加盟団体内訳(1910-11)

支部名	バーミンガム
労働組合及び支部	29
生活協同組合	3
教師組合	2
成人学校・クラス	24
宗教団体	4
教育団体	5
政治団体	6
その他	3
合計	76

出典: Workers' Educational Association, *Seventh Annual Report and Statement of Accounts, July 1st, 1910*, London, 1910, p.47-8, 51-2.

バーミンガム大学は、WEA ミッドランド地区並びにバーミンガム支部の活動を全面的に支援した。バーミンガム大学と WEA は、1905 年 10 月の会合開催と同時に、新たに連携して展開する活動について準備を進めていた。その一つにソーシャル・スタディ・コースがあった。

バーミンガム大学はソーシャル・スタディ・コースを実施する組織としてソーシャル・スタディ委員会(Social Study Committee)を学内に設置した。その目的は、①公共事業や社会事業に従事したいと望む者のための体系的な訓練コースの提供と、②WEA と連携して夜間に労働者の

男女のためのクラスや講義を組織することであった。WEA との連携が重視されたため、ソーシャル・スタディ委員会は、大学拡張委員会とは異なり、大学人からなる実行委員会(executive committee)と WEA からの代表者も含む諮問委員会(Advisory Committee)とで構成された。

1906-7 年の実行委員会の委員は、アシュリー教授、ミューアヘッド教授、フィールダー教授、ロバートソン(バーミンガム市医務官)(John Robertson)、マスターマン教授、シジウィック女史(図書館司書)(Rose Sidgwick)、カーカルディ教授(事務局)(A. W. Kirkaldy)であった<sup>14</sup>。主として講義を担当する教授で構成された。

1909-10 年の諮問委員会の委員には、成人教育機関であるウッドブルックのレンデル・ハリス (Rendel Harris)、バーミンガム女性セツルメントのオルブライト(R. Albright)、バーミンガムでのアーツ・アンド・クラフツ運動のニューウィル(M. J. Newill)、バーミンガム主教のゴア、WEA ミッドランド地区からプライスら 9 名が選ばれていた。ソーシャル・スタディ委員会は、大学の正規の委員会に位置づけられていたが、関係団体から委員を選出しており、労働者階級の任意団体である WEA もその中に位置づけられた。新しいかたちの組織であった。

## 2.2. ソーシャル・スタディ・コース

ソーシャル・スタディ・コースは、1905 年の WEA 年次集会の開催に向けた準備期間とほぼ同じ時期に計画されており、1905-6 年から実施された。前述の学長報告における「ソーシャル・スタディ計画」のことであり、1905 年の WEA 年次集会並びにミッドランド地区設立会合の成果とされているが、バーミンガム大学の全面的な支援のもとに計画、実施された。このことは、コースの講師等をもみても明らかである。さらに、バーミンガム大学では、会合開催以前の WEA ミッドランド地区が整うより前にソーシャル・スタディ・コース実施の承認が得られていた<sup>15</sup>。

ソーシャル・スタディ・コースがどのような教育コースであったのかをみていく。1905-6 年のソーシャル・スタディ・コースは、労働者たちを対象としていたので、毎週火曜日午後 8 時 15 分から市内のメディカル・シアター (Medical Theatre) で開催された。5 つの科目で構成されるコースで、各科目 5 回ずつ設定されていた。形態は、講義だけでなく、討論も行われた。受講料は、全 5 科目で 5 シリング、1 科目のみの場合は 1 シリングであった。1 回目は無料とされた。

また、コースの受講生のために、ソーシャル・スタディ

表2 1906-7年ソーシャル・スタディ・コース

	講義名	講師	内容	期間
1	社会理想	ミュアヘッド (J. H. Muirhead)	1.知識の必要性 2.生活と精神の基本的事実 3.生活は何によって人間らしくなるのか？ 4.社会の発展 5.個人主義と社会主義	10月16日から 11月13日まで
2	社会経済学	カーカルディ (A. W. Kirkaldy)	1.経済活動の基礎と展開 2.地主は何をし、何を得る 3.工場主は何をし、何を得る 4.労働者は何をし、何を得る 5.可能な理想と不可能な理想	11月20日から 12月18日まで
3	産業団体	アシュリー (W. J. Ashley)	1.生活協同の問題 2.工場の問題 3.資本連携の問題 4.労働組合主義の問題 5.国家介入の問題	1月15日から 2月12日まで
4	地方行政	マスターマン (J. H. B. Masterman)	1.イングランドにおける地方政府の原理 2.イングランド救貧法の歴史 3.救貧行政 4.国民教育 5.1903年教育法	2月17日から 3月26日まで
5	公衆衛生・住宅	ロバートソン (John Robertson) (バーミンガム市医務官)	1.衛生の定義 2.伝染病 3.栄養必要量 4.環境 5.住宅	4月16日から 5月14日まで

出典：University of Birmingham, *Calendar for the Session 1906-07*, pp.347-8 より筆者作成。

図書室が準備された。この図書室はソーシャル・スタディの核をなすもの、と WEA は評価している。大学が45ポンド寄付をしたことにより実現した図書室である。講師が推薦する図書をそれぞれ数冊ずつ購入しており、全部で192冊になったという。初年にかかなりの数の書籍が用意された。図書室の使用料は受講料に含まれていた。労働者たちにとって書籍の確保は重要な課題であった。しばしば大学拡張講義でも困難な課題として報告されていたが、コース実施当初からソーシャル・スタディ図書室を設置して労働者の学習を支援していたことは注目に値する。その他にも1905-6年のソーシャル・スタディ・コースは、講義出席者の数、試験課題の質、そして財政面の結果、これらすべてにおいて満足のいくものであったという。平均で300名という非常に多くの聴衆を集め、エッセイの水準も高く予想以上の成功を収めたと評価される<sup>16</sup>。

バーミンガム大学は、WEAからの熱心な要望に応じて、ソーシャル・スタディ・コースを翌年も繰り返した。講義名、担当講師、内容、実施時期をまとめたのが表2である<sup>17</sup>。当時バーミンガム大学で最も優れた教授の一人であった哲学のミュアヘッドによる講座から始まり、経済、経営、行政、公衆衛生という労働者たちにとって自らの生活の現状を理解するに役立つ内容となっていた。ソーシャル・スタディ委員会が大学に提出した報告書が以下である。

労働者たちが参加する機会を得られるように、夜間の時間帯に開講した。本委員会は、コースを再度実施することに決定した。労働者教育協会の執行部と相談した後、大学のメディカル・シアターで火曜日8時15分から講義を開くことに決定した。10月

16日に開始した。

結果は、委員会がもっていた楽観的な期待を超えるものであった。大勢の聴衆が集まることが一般的であり、時にはディカル・シアターがいっぱいになるほどであった。

最も満足いく点は、出席者が定期的に参加しており、聴衆の数が大学の年度の間ずっと維持されたことである。

聴衆が多かっただけではない。毎週課されたレポートが労働者から郵送されており、その数も満足いくものであったという。

12名が試験を受けた。彼らの答えは、読書と思考の成果があらわれており、講義内容とその後の討論を理解できていることを示していた。12名全員に修了書(certificate)を授与した。そのうち3名は「優等」の評価がついた。褒章として書籍が学長とミュアヘッド教授から送られた。これは、上位4名の者に与えられている。

(中略)

労働者教育協会は、本委員会に労働者の教育を支援する取り組みを続けることを要望している。詳細に検討した結果、翌年に科学科目の講義コースを実施するよう準備している。11月5日火曜日8時15分から開始する。学長、ポインティング教授、ラップワース教授、ターナー教授がそれぞれ5回担当することを快く承諾してくれている<sup>18</sup>。

その他にも、WEAからの参加者である労働者の受講料は設定されていた額の半額であり、参加しやすい金額に抑えられていた。ソーシャル・スタディ・コースは、労働者の高等教育要求に応える講座であり、大学拡張講義とは異なる新たな大学の社会連携の事例と位置づけられる。

一方、WEAは、労働者がソーシャル・スタディ・コースで学ぶことの意味を次のように評価していた。

社会福祉の観点から講義やクラスの結果を評価することは、簡単なことではない。労働組合や成人学校の役員として、他の講義や議論のための基礎として、受けた教育を利用する者たちが参加していた。獲得された知識を全体としてみると、社会的な問題に関わるものであり、この活動での議論は、労働者階級の団体の拡大とその活動に有利な影響を与えるに違いない<sup>19</sup>。

WEAは地方支部においても加盟団体を有し、労働者組織

を教育の振興をもとに一つに結び付けた団体である。そのため、講座の参加者は必然的に労働者組織の代表をとめるような人物であった。そうした労働者たちにとって、ソーシャル・スタディ・コースは労働組合や生活協同組合といった自ら所属する団体が抱える問題について議論し対応を検討する際の基礎となる、と評価された。

バーミンガムにおいて実施されていたソーシャル・スタディ・コースは、WEAミッドランド地区を通じて宣伝され、他の地域にも広がった。WEA中央当局の機関紙『ハイウェイ』の創刊号において、「コベントリは、1906-7年にバーミンガムで、翌1907-8年にはウォルソールでも大きな成功をおさめた、「ソーシャル・スタディ」コースを地方教育当局を通して再び実施する準備をしている」、と報告されている<sup>20</sup>。開設当初のソーシャル・スタディ・コースは、バーミンガム大学がWEAと連携して労働者を主たる対象に始まり、地方教育当局の協力を得ながらバーミンガム、ウォルソール、コベントリと広がっていった。

### 2.3. ソーシャル・スタディ・コースの変容

労働者のための教育コースとしてスタートしたソーシャル・スタディ・コースは、その後、社会福祉の拡大を背景にソーシャル・ワーカーの養成に向けた総合的な教育コースへと段階的に変容していった。バーミンガム大学は、1908-9年に、従来のコースに加えて、実施期間を拡大し、教育内容も大幅に増やした新たなソーシャル・スタディ・コースを始めた。具体的には、科目を5つから9つに増やした。「イギリス憲法」、「経済分析」、「統計の手法」、「ソーシャル・ワーカーのための法律」、「ソーシャル・ワークの目的と方法」が新たに加わり、1科目あたりの回数も10~20回に増加した。開設時間も9つのコースのうち5つは昼間に、4つは夜間に設定された。例えば、最初の科目として設定されていた「イギリス憲法」は、冬学期の間の毎週火曜日と水曜日、午前10時30分からおこなわれた<sup>21</sup>。このソーシャル・スタディ・コースは、より専門的に学びたい受講生も対象とした1年間のコースであった。

バーミンガム大学はさらに、ソーシャル・スタディ・コースを高度で専門的なコースとなるよう改革した。コース名を「社会・慈善活動のための訓練」と改称し、ディプロマの授与を打ち出した。内容も座学だけでなく、救貧法関係施設やインダストリアル・スクール、ワークハウス、障がい児ホームなどの施設の見学を加えた。合わせてコースの対象が明確にされた。

バーミンガム大学のソーシャル・スタディ委員会

は、実践的な訓練と結びついた、体系的な教育コースを組織することで、ますます拡大していきだろよう要望を満たす方向で始動できるよう努めている。そうしたコースは、以下の者たちにとって魅力的であろう。

- (1) 地方政府関係団体に選ばれてあるいは協力してサービスを提供することを支援したいと望む者
- (2) 地方政府あるいは国の行政機関のいずれかの部門の職に従事する行政官(救貧法、公衆衛生、住宅、職業紹介所など)
- (3) フィランソロピーあるいは「福祉」に関わる活動についての訓練を受けたり、経験をしたいと望む者(専門職もボランティアも含む)
- (4) 各宗派の聖職者や教会従事者
- (5) 労働組合、生活協同組合、友愛組合、その他団体の役員<sup>22</sup>

バーミンガム大学は WEA を通じて受講していた労働者たちを 5 番目に位置づけており、彼らがコースの主たる対象者でなくなったことがわかる。ソーシャル・スタディ・ディプロマ・コースは、ウッドブルックやバーミンガム女性セツルメントと連携したソーシャル・ワーカー養成コースとなった(土井, 2020)。バーミンガム大学がソーシャル・スタディ・コースを改革した背景には、WEA による労働者たちを対象とした新たな取り組みである大学チュートリアル・クラスがあった。

### 3. 大学チュートリアル・クラス

#### 3.1. 労働者教育協会とオックスフォード大学とによる大学チュートリアル・クラスの導入

バーミンガム大学が WEA ミッドランド地区と連携してソーシャル・スタディ・コースを実施していた頃、WEA 中央当局は、オックスフォード大学と連携した新たな活動として大学チュートリアル・クラスを計画、実施した。大学チュートリアル・クラスのスタートは、1907 年 8 月オックスフォード大学において開催された「オックスフォードは労働者のために何をなすことができるのか」と題する会合にあった。

この会合で、WEA の代表者とオックスフォード大学の代表者からなる委員会を組織し、新たな「大学の境界を超えた教育活動」について議論することが決議された。WEA とオックスフォード大学との合同委員会は、議論の結果を 1908 年に報告書『オックスフォード大学と労働者階級の教育—労働者の高等教育と大学との関係に関する大学ならびに労働者階級代表合同委員会報告書—』(以下、「1908

年報告書」と略記)として刊行した(Oxford and Working-class Education, 1908 安原訳, 2006)。

1908 年報告書で示された大学教育に対する労働者の要求は、大学をあらゆる階級の人々に開かれたものにするのであった。そのための方途として大学チュートリアル・クラスを組織することが提案された。大学チュートリアル・クラスは、労働者の男女を対象とし、大学が各地に派遣する講師による講義と討論とで構成されるクラスである。大学拡張講義とは異なり、一クラスあたり 30 人前後の受講生とし、10 月から 3 月までの半年間、毎週、同一科目を少なくとも 2 年以上にわたって継続的、体系的に学ぶクラスである。クラスの規模を一定以下にするのは、受講生が講師に質問を投げかけることができるようにするためであり、講師が受講生に対して個人指導が可能になる規模にするためである。

またクラスは、1 回 2 時間とされ、前半は講師による講義、後半は質疑応答と討論とされた。受講生は、2 回に 1 回の割合でエッセイを作成することとされた。講師は、受講生の作成するエッセイを詳細に検討し、次に読むべき書物について指導することが求められた。

大学チュートリアル・クラスの特徴の一つにその位置づけがあった。大学チュートリアル・クラスは、大学拡張講義とは異なり、1908 年報告書において以下のように位置づけられた。

構外教育は、それがいかに優れたものであったとしても、大学教育の代替物とみなされてはならない。構外教育はあくまで、オックスフォードでの正規の勉学の準備としてみなされなければならない<sup>23</sup>。

実際に、大学チュートリアル・クラスからオックスフォード大学のカレッジに進学した受講生もいた。1908 年に開設されたロングトンの実験的チュートリアル・クラスで学んだグリフィス(M. Griffith)は、1913 年にオックスフォード大学のセント・ヒルダズ・ホールに進学し、経済学・政治学ディプロマ・コースを修了している(安原, 2006b; Goldman, 1995)。

大学チュートリアル・クラスの二つ目の特徴は、労働者による運営である。運営を労働者組織の手にゆだねることとし、労働者の教育要求に応えるようにすることが目指された。オックスフォード大学から 7 名と WEA から 7 名で構成される常設の合同委員会を設け、チュートリアル・クラスの設置に必要な財源の確保、講師の任命、大学進学に向けた財源の確保と指導・助言、大学当局への助言等を担うこととされた。

大学チュートリアル・クラスの特徴の三つ目は、労働者たちの受講目的と科目である。大学チュートリアル・クラスで労働者たちは教養教育(リベラル・エデュケーション)を「仲間のために」学ぶことを求めている。教育によって技術を得て、自らの階級から離脱するのではなく、自分たちの現状の生活がどのようにして生まれたのか、市民として必要な資質は何か、合理的思考が得られる教養教育を求めた。実際に、1908年から始まったロッジデールとロングトンでの実験的クラスにおいて教えられたのは、R. H. トーニー(R. H. Tawney)による経済史であった(Goldman, 1995; Rose, 2001; 安原, 2006b; 松浦, 2000; 松浦, 2004)。

こうしたオックスフォード大学と WEA 中央当局が連携して 1908 年からはじまった大学チュートリアル・クラスは、数年のうちに他の大学と WEA との間でも組織されるようになり、全国各地に急速に拡大した。

### 3.2. バーミンガム大学における大学チュートリアル・クラス

バーミンガム大学と WEA ミッドランド地区およびバーミンガム支部もオックスフォード大学に続いていち早く大学チュートリアル・クラスを実施した。バーミンガム大学では、1909 年 12 月に評議会(Senate)が合同委員会の設置を承認した<sup>24</sup>。

合同委員会の委員は、大学側の委員 7 名、労働者側 6 名であった。大学側は、学長、バーミンガム主教、カーカルディ教授、ミュアヘッド教授、ジョージ・ヒース(George Heath)、ウッド(H. G. Wood)、ウッドハウス(事務局担当)(Helen Wodehouse)の 7 名であった。労働者側は、ミッドランド成人学校連合(Midland Adult School Union)、バーミンガム労働組合会議(Birmingham Trades Council)、ミッドランド地区労働組合連盟 (Midland Counties' Trade Federation)、南スタッフォードシャ坑夫連盟(South Staffordshire Miners' Federation)、生活協同組合ミッドランド地区(Co-operative Union, Midland Section)、WEA ミッドランド地区の 6 つの労働者組織の代表であった<sup>25</sup>。この合同委員会は、バーミンガム大学における独立の委員会として位置づけられた。バーミンガム大学側の委員は、大学拡張講義及びソーシャル・スタディ・コースを支援している大学人たちであった。代表には学長を含んでおり、1919 年まではロッジ、1920 年からは新学長ロバートソン(C. Grant Robertson)が委員をつとめた。

合同委員会の初会合は、1910 年 3 月 15 日に開催された。学長のロッジが議長に、WEA のブライスが事務局長に選任された。あわせて、大学チュートリアル・クラスの講師をあらたに任命し、1 科目あたり年間 50 ポンドを保

障することが決められた。また、受講生が 30 名に達した場合、カーカルディ教授が担当することも合わせて決められた<sup>26</sup>。

最初の合同委員会の報告書である 1910 年の報告書には、資金の確保が大きな課題になっていたことが示されている。バーミンガム近郊での大学チュートリアル・クラスへの要望は多く、バーミンガムだけでなくスターチリー(Stirchley)やキダーミンスター(Kidderminster)においてもクラスの開設が求められていた。スターチリーにおいては、30 名の受講生がすでに決まっていた。しかしながら資金の目途が立っていなかった。そのため、合同委員会はバーミンガム市に対して 100 ポンドの補助金を求めることを決定した<sup>27</sup>。初期の大学チュートリアル・クラスの実施にはたいいていの場合、資金の確保が課題の一つであった。公的な補助金を得ることは重要であり、この後大学チュートリアル・クラスには教育院(Board of Education)から補助金が支給されることとなった<sup>28</sup>。

バーミンガム大学による WEA と連携した大学チュートリアル・クラスは、バーミンガム近郊で開設された。クラス数の推移を示したのが表 3 である。

表 3 バーミンガムにおける大学チュートリアル・クラス数

	10-11	11-12	12-13	13-14	14-15	15-16	16-17	17-18	18-19
チュートリアル・クラス	7	7	9	5	6	6	5	6	9
	20-21	21-22	22-23	23-24	24-25	25-26	26-27	27-28	28-29
チュートリアル・クラス	13	17	19	22	29	34	37	36	34
予備クラス・1年クラス	27	30	27	27	29	9	7	17	11

出典：University of Birmingham, *Report of the principal to the council for the Eleventh Session- Twenty-fifth Session, 1910-1926*, Extra mural and other activities; West Midland District. *Annual Report, 1919-1922*; Studd. E. J., *The University of Birmingham and the WEA* 等から筆者作成。

1919 年までは 10 クラス未満であったが、23 年から増加していき、1925 年以降は 35 クラス前後にまでになった。

開講された科目は、1913-14 年は 5 クラス開設されていたが、「歴史」が 1 クラス、「経済学・経済史」が 2 クラス、「哲学」が 1 クラス、「文学」が 1 クラスであった。1912-13 年の報告書によると、グリーン(Leonard Green)を講師とした「哲学」のクラスが 3 年目を終えて一定の成果を上げたこと、学習サークルとして 4 年目の活動に入ることと、新たな「哲学」のクラスを 1913-14 年も同様に開設する予定であることが記されている<sup>29</sup>。また、1913-14 年は、講師(チューター)が 24 名であり、そのうち 10 名がバーミンガム大学の教員であった。その他に大学職員と

しての地位と権利を享受できる大学チュートリアル・クラス専属職員が2名配置された。1名は南スタッフオードンシャに常駐する講師(チューター)であった。1920年代末には、大学チュートリアル・クラスはバーミンガム大学での構外教育の中心的な取り組みの一つとなった。

### 3.3. 独自の取り組み—Industrial Certificate—

大学チュートリアル・クラスの位置づけは、正規の大学教育を受けるための準備であり、高等教育機会の代替ではないとされた。しかしながら、中等教育の障壁があり、大学チュートリアル・クラスを終えた労働者たちが正規の学生としてバーミンガム大学に入学し、学ぶことは依然として困難であった<sup>30</sup>。そこでバーミンガム大学は、労働者のために、高度で専門的な高等教育を受け、ディプロマを取得できる新たな学科(department)を設置した。Industrial Certificate Department である。既存の学士学位を取得できる学部とは異なるが、正規の学生として労働組合が推薦する労働者を受け入れ、働きながら学び、産業の資格(certification)を授与する学科である。1919年に開設された。この取り組みは、他の大学にはないものであり、「われわれの大学は、こうした学科の開設においてパイオニアとしての役割を果たしてきた」と評価されている<sup>31</sup>。

バーミンガム大学は、Industrial Certificate Department にふさわしい新たな教育課程を編成した。科目は、「現代産業の経済学」、「社会哲学」、「現代史」、「中央・地方政府」、「英文学」であった。期間は1年間で、大学の学期間であるため実質は26週であった。講義が設定されていたのは、月曜日と火曜日のみであり、両日は終日大学で学ぶ時間割となっていた。学生は労働組合が指名し、学生が授業料を支払うことはなかった。むしろ組合から賃金が支給された。

Industrial Certificate Department は、授業料、時間、労働との競合といった労働者たちが抱える困難をできるだけ取り除けるよう配慮された学科であった。労働組合の中心的な組合員が、働きながら正規の高等教育機会に近い専門教育を受けることができ、学習の成果を生かすことが望まれた。1919-20年の学長報告において、「本ディプロマを取得した者たちは、希望すれば必ず有給の職を得ている。このことは、大学での教育(training)とディプロマがもつ価値とが学外で認められている優れた証左である」と記し、構外教育から伸展した労働者のための独自の学科と資格付与の意義を強調した<sup>32</sup>。

Industrial Certificate Department で学んだ労働者は、1年目は13名、2年目は20名、3年目は14名、4年目と5年目各16名であった。しかしながら、6年目の1924-25年は

受講生が集まらず、中止となり、Industrial Certificate Department はわずか5年で終焉をむかえた。

### おわりに

本稿では、バーミンガム大学を取り上げ、20世紀初頭の構外教育をWEA ミッドランド地区並びにバーミンガム支部との連携という視点からそのあり方と活動に焦点をあてて考察した。

バーミンガム大学では、大学昇格当初から大学拡張委員会を設置し、独自にミッドランド地域の地方センターとむすびついて大学拡張講義を提供していたことが明らかとなった。1903年にWEAが誕生すると、バーミンガム大学はその設立時から会合に代表を送るなどWEAの活動を支援した。1905年にはWEA ミッドランド地区の設立に積極的に関与し、新たな教育活動としてソーシャル・スタディ・コースを開設した。

ソーシャル・スタディ・コースは、哲学、経済学、経営学、行政学、公衆衛生を大学拡張講義より体系的組織的に学ぶコースであり、労働者に合わせて夜間に開設された。バーミンガム大学にとっては、地域の労働者組織と連携し、高まる労働者たちの教育要求に応えることができた取り組みであった。しかしながら、コースをより高度で専門的な内容にすることで労働者を対象としたコースから変容していくこととなった。

バーミンガム大学は、1909年から大学チュートリアル・クラスを実施した。それは、WEA 中央当局とオックスフォード大学とが計画、実施した方式に則った、3年間のより体系的なクラスであった。大学チュートリアル・クラスの実態は、本稿では明らかにすることができなかった。残された課題である。

またバーミンガム大学は、1919年から労働者のための独自の学科としてIndustrial Certificate Department を開設した。教育内容、時間、授業料といった点において労働者に合わせた配慮がなされ、労働組合の指導者層を対象とし、彼らが働きながら学ぶことができる学科であった。これは労働者を正規の学生として受け入れる新たな取り組みであり、大学チュートリアル・クラスよりも進んだ大学の地域連携の取り組みであった。とはいえ、Industrial Certificate Department は5年で閉じられた。開設の経緯や課題の所在については本稿では明らかにできなかった。残された課題である。

【付記】本研究はJSPS 科研費 21K02184 の助成を受けたものです。

## 注

- <sup>1</sup> 安原義仁(2021). 『イギリス大学史—中世から現代まで—』 昭和堂, p.396.
- <sup>2</sup> 同上, p.388.
- <sup>3</sup> 同上, p.397.
- <sup>4</sup> University of Birmingham, *Report of the principal to the council, for the fifth session, 1904-05*, pp.14-15, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>5</sup> University of Birmingham, *Report of the Principle to the Council for the 6th Session 1905-1906*, p.15, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>6</sup> *Ibid.*, p.16.
- <sup>7</sup> *Record of university senate, UB/SEN/1/3, University of Birmingham, Minutes of Senate, No. 3*, p.163, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>8</sup> Higher Education of Working Men, *being the Official Report of the Joint Conference between Co-operators, Trade Unionists, and University Extension Authorities, held at Oxford, on Saturday, August 22<sup>nd</sup>, 1903*, p 5, at Workers' Educational Association Archive, London Metropolitan University.
- <sup>9</sup> Price, T. W. (1924). *The Story of the Workers' Educational Association from 1903 to 1924*, London : Labour Publishing Company, p.9.
- <sup>10</sup> Higher Education of Working Men, *Second annual report, list of Members and Statement of accounts, July 1<sup>st</sup>, 1905*, at Workers' Educational Association Archive, London Metropolitan University.
- <sup>11</sup> University of Birmingham, *op.cit., Minutes of meeting of the Senate, No. 3, held on Tuesday October 3rd 1905*, p. 132.
- <sup>12</sup> Workers' Educational Association, *Third annual report, list of Members and Statement of accounts, July 1<sup>st</sup>, 1906*, p.7, at Workers' Educational Association Archive, London Metropolitan University.
- <sup>13</sup> University of Birmingham, *op.cit., Report of the Principle to the Council for the 6th Session*, p.14-15.
- <sup>14</sup> University of Birmingham, *Calendar for the Session 1906-07*, pp. 347-8, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>15</sup> *Record of university senate, UB/Arts 1, University of Birmingham, Minutes of Faculty of Arts, No. 1*, p.451, at Cadbury Research Library, University of Birmingham. WEA の年次集会は、1905年10月14日に開催されている。1905年9月29日の時点でソーシャル・スタディ・コース実施の承認が得られていた。
- <sup>16</sup> University of Birmingham, *op.cit., Report of the Principle to the Council for the 6th Session*, pp.14-17.
- <sup>17</sup> University of Birmingham, *op.cit., Calendar for the Session 1906-07*, pp. 347-8.
- <sup>18</sup> University of Birmingham, *Course of Social Study session 1906-7, Report of the Executive Committee as presented to the Faculty of Arts and Consultative Committee, June, 1907*.
- <sup>19</sup> Workers' Educational Association, *Birmingham, First Annual Report, 1906-7*, p. 4, at Birmingham City Library.
- <sup>20</sup> Workers' Educational Association, *The Highway*, vol.1, no. 1, p. 16.

- <sup>21</sup> *University of Birmingham. Calendar for the Session 1908-09, Social Study*, pp. 383-386, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>22</sup> *University of Birmingham. Calendar for the Session 1910-11*, pp. 397-404, Faculty of Arts, Social Study, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>23</sup> *Oxford and Working-class Education*, 1908 安原訳, 2006, p. 65.
- <sup>24</sup> University of Birmingham, *UB/SEN/1/4, University of Birmingham, Minutes of Senate, No. 4*, p. 185, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>25</sup> University of Birmingham, *Report of the Principal to the Council, for the Tenth Session, 1909-10*, pp.11, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>26</sup> University of Birmingham, *op.cit., Minutes of Senate, No. 4*, p.207.
- <sup>27</sup> *Ibid.*, pp.252-253.
- <sup>28</sup> 教育院は、1899年教育法によって設置された、教育を所管する最初の中央行政機関である。WEAに対する教育院からの補助金については、1924年成人教育規則に基づく責任団体(responsible bodies)の認定によって制度化された。
- <sup>29</sup> University of Birmingham, *UB/Arts 1, University of Birmingham, Minutes of Faculty of Arts, No. 1*, p.14, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>30</sup> 大学チュートリアル・クラスからバーミンガム大学に正規の学生として入学し学んだ労働者成人学生の史料は見つけられていない。ただし、1922-23年の学長報告において、バーミンガムの成人学生1名がWEA中央当局の奨学金を得て3カ月間大学でフルタイムで学ぶことができたことはうれしいことであると報告されている。現在6カ月間学ぶことができる奨学金に応募していると記されており、大学チュートリアル・クラスを終えた労働者がその後、正規の学生として3年間大学で学び学位を取得することは依然として困難であると考えられる。University of Birmingham, *Report of the Principal to the Council, for the Twenty-third Session, 1922-23*, pp.26, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>31</sup> University of Birmingham, *Report of the Principal to the Council, for the Twentieth Session, 1919-20*, pp.17, at Cadbury Research Library, University of Birmingham.
- <sup>32</sup> *Ibid.*

## 引用参考文献

- Anderson, R. D., (2004). *European universities from the Enlightenment to 1914*. Oxford University Press.
- アンダーソン, R. D. (2012). 『近代ヨーロッパ大学史—啓蒙期から1914年まで』(安原義仁・橋本伸也監訳) 昭和堂.
- Goldman, L. (1995). *Dons and Workers: Oxford and Adult Education since 1850*, Clarendon Press.
- Ives, E. (2000). *The First Civic University: Birmingham 1880-*

- 1980 *An Introductory History*, The University of Birmingham university press.
- 香川正弘(1991). 「大学拡張の原点—スチュアートの大学拡張構想—I—」『上智大学教育学論集』26, 48-91.
- 香川正弘(1992). 「大学拡張の原点—スチュアートの大学拡張構想-II—」『上智大学教育学論集』27, 1-39.
- 香川正弘(2005). 「オックスフォード大学における最初の大学拡張委員会(その1)」『上智大学教育学論集』40, 19-35.
- 松浦京子(2000). 「義務と自負—成人教育におけるシティズンシップ」小関隆(編)『世紀転換期イギリスのくびと—アソシエーションとシティズンシップ—』人文書院.
- 松浦京子(2004). 「知の喜びと仲間のために—前世紀転換期イギリスの労働者成人教育運動—」望田幸男・広田照幸(編)『実業世界の教育社会史』昭和堂.
- 宮坂広作(1996). 『英国成人教育史の研究I・II』明石書店.
- 中村勝美(2016). 「イギリスにおける市民大学の誕生と学士課程教育の理念—バーミンガム大学の成立過程を中心に」『広島女学院大学人間生活学部紀要』3, 39-47.
- Ockwell, A., & Pollins, H. (2000). "Extension" in all its forms. In M. G. Brock, & M. C. Curthoys, (ed.), *The History of the University of Oxford Volume VII: The Nineteenth Century, Part 2*(pp. 661-688). Clarendon Press.
- Oxford and Working-class Education, Being the Report of a Joint Committee of University and Working-class Representatives on the Relation of the University to the Higher Education of Workpeople*, (second edition, revised), Oxford, 1951(reprinted); 安原義仁訳(2006). 「オックスフォード大学と労働者階級の教育：労働者の高等教育と大学との関係に関する大学ならびに労働者階級代表合同委員会報告書」広島大学高等教育研究開発センター『高等教育研究叢書 RIHE』85.(本文中では『1908年報告書』と略記)
- Price, T. W. (1924). *The Story of the Workers' Educational Association from 1903 to 1924*, London: Labour Publishing Company.
- Roberts, S. K. (2003). The Evolution of the WEA in the West Midlands, 1905-26. In Roberts, S. K. (ed.), *A Ministry of Enthusiasm: Centenary Essays on the Workers' Educational Association*(pp.77-96). Pluto Press.
- Rose, J. (2001). "The Whole Contention Concerning the Workers' Educational Association", *The Intellectual Life of the British Working Classes*, Yale University Press.
- Studd, E. J. (1950). *The University of Birmingham and the W.E.A., a brief account of the contribution of the University of Birmingham and the W. E. A. to Adult Education in the West Midland Area*, The University of Birmingham and the W.E.A.
- 土井貴子(2001). 「19世紀末オックスフォードにおける大学拡張の実態と問題点」中国四国教育学会編『教育学研究紀要』47(1), 198-203.
- 土井貴子(2008). 「労働者教育協会(Workers' Educational Association)の設立過程—初期の組織と活動を中心に—」『瀬戸内短期大学紀要』39, 1-12.
- 土井貴子(2020). 「20世紀前半ウッドブルックとバーミンガム大学の連携—ソーシャル・ワーク教育に焦点をあてて—」日本社会教育学会『社会教育学研究』56, 1-9.
- Welch, E. (1973). *The Peripatetic University: Cambridge Local Lectures 1873-1973*, Cambridge University Press.
- 矢口悦子(2000). 『イギリス成人教育の思想と制度—背景としてのリベラリズムと責任団体制度—』新曜社.
- 山崎智子(2021). 『イギリス大学制度成立史—国家と大学のダイナミズム—』東信堂.
- 安原義仁(2006a). 「大学拡張講義の講師たち—前世紀転換期オックスフォードの旅する教師—」松塚俊三・安原義仁(編)『国家・共同体・教師の戦略—教師の比較社会史』昭和堂.
- 安原義仁(2006b). 「初期チュートリアル・クラス労働者成人学生のオックスフォード進学と奨学金問題—個人の上昇か集団としての向上か—」友田卓爾(編)『西洋近代における個と共同性』溪水社.
- 安原義仁(2021). 『イギリス大学史—中世から現代まで—』昭和堂.
- 渡邊洋子(2006). 「イギリス成人教育の方法論的成立に関する史的考察：初期チュートリアル・クラスの生成過程に注目して」『京都大学大学院教育学研究科紀要』52, 1-26.
- Workers' Educational Association Midland District 1905-1930, 25th Anniversary Celebrations at the University*, Edgbaston, Birmingham, Saturday, March 28th, 1931.

# Contact with City and District at University of Birmingham in the Early 20th Century: With the Workers' Educational Association

Takako Doi

(Okayama University of Science)

This paper is a history of university adult education since 1900 to 1920's. It focuses on the University of Birmingham which is the first civic University. Upon gaining Royal Charter in 1900, Birmingham University established an Extension Lectures Committee in 1902 and delivered university extension courses. The importance of bringing the University into closer touch with working class organisations in the Midland was growing. When the Workers' Educational Association (WEA) was founded in 1903, the University of Birmingham, principal Oliver Lodge supported it. He took the chair at the WEA Annual Meeting held in Birmingham in 1905 and supported the establishment of the WEA Midlands Section. Concurrently, the University of Birmingham and the WEA Midlands Section collaborated to establish the scheme of Social Study. It was special evening lectures the University able to co-operate in a movement which attracted many of the best artisans. Subsequently, when university tutorial classes began, University of Birmingham also followed the establishment of tutorial classes in connexion with the WEA Midlands Section across various locations in Midlands. By the 1920s, the University Tutorial Classes had become one of the main activities at the extra-mural activities of the University of Birmingham. In 1919, Birmingham University organized Industrial Certificate Department. It was the special courses for trade unionists, admitted workers as regular students, enabling them to work and study for one year with the award of the Industrial Certificates. It was a new form of the contact with city and district at Civic Universities. The University of Birmingham was a pioneer in establish these courses.

Keywords: University Adult Education, University of Birmingham, Workers' Educational Association